

【*Knowing, Teaching and Learning History* 読書会】

## Introduction

(前半部分：pp.1-6)

担当：川口広美（広島大学大学院教育学研究科）

[hkawaguchi@hiroshima-u.ac.jp](mailto:hkawaguchi@hiroshima-u.ac.jp)

### ひとこと概要

この本を書くようになった背景（歴史学と歴史教育の関連性、「教室」に注目した歴史教育研究の近年の動向）及び実際の経緯が書かれています

### （1）歴史学・歴史教育・歴史教育研究に関する前提の変化

・1990年代までに「歴史カリキュラム」は大統領選の争点や、トークショーのネタというように誰もが話したくなるようなものとみなされるようになった。

例) 1995年1月18日スレイド・ゴートン上院議員による上院でのナショナルキャラクターに関する質問

・歴史に関する公的な関心（public interest in history）は、公的な場における歴史家の新しい関心に対応する

・歴史家が記憶に対して実際に行っている実践

- ・歴史家ではない人たちの多様な実践（例：映画や博物館展示）に対しての専門的な検証
- ・カルチュラルスタディーズを用いたり、文化人類学者と共同で学んだり、哲学者や文学者をベースにした問いにも挑む

→歴史家の実践とギャップがあるのが、学校教育における歴史教育・学習実践

・歴史教育は、本来現代社会において、集団的記憶を構築するための主要な位置づけを占めているが、歴史家は歴史教育に関して余り関心を抱いていない（博物館などには関心を寄せているのに・・・）

・このように歴史家が教育実践を軽視していることが次のような混乱を招いている

「歴史は特定の過去認識を形成するような無批判的な「遺産（Lowenthal 曰く）」の実践を行っているのか？」

⇔「歴史教育は過去や過去の栄光を批判的に検討するような批判的で学問的な歴史を行うのか？」

→この問いの答えは教師によって異なるものになっている

・近年、これまでの当たり前ではない歴史を教え・学ぶ意味とは何かに関する多様な試みがされている。

#### ＜これまでの当たり前＞

- ・歴史教育は「内容」「ペダゴジー」もしくは「内容」「プロセス」の軸で語られてきた。
- ・講義からロールプレイになろうとも、その手法の前提にあるのは「有効性 (effectiveness)」である

#### ＜近年の動向＞

- ・過去に関する知識についてコミュニケーションすることは、認識・文化的活動であると認識
- ・それは、現代において「歴史的」というものが持つ意味を深く・意図しない方法で伝達することになる

(例) 歴史的知識を評価する方法 (多肢選択・定期テスト・論文) によって「歴史的知識」の定義が決まる

→ヘイドン・ホワイトが言うところの「フォームに埋め込まれた内容」

→これに伴い、教室というのはただのモニュメントではなく、民主主義社会における歴史とはどういう意味があるか、あるいは意味を持つべきか、という議論に応じるものとみなされ、多様な研究が行われるようになった

・近年の「教室」に注目した研究の例

(1) 「行動」ではなく「意味」や「感覚(sense)」の創出に注目する

→認知革命の影響。学習とは教師の行動や教科書の記述から語られるものではなく、複雑な活動である

(2) 歴史学研究の変化に対応した歴史教育や学習

→歴史研究が排除してきたマージナルな人々を含みこもう (例: 人種・性別・ポストコロニアルなど) という試みを行ってきた

(3) 歴史意識 (historical consciousness) や集団的記憶、過去に関して公的に行われるプレゼンテーションのあり方に注目するもの (特に北アメリカが多い)

→国家形成と歴史教育のあり方との関連性

→これらのことから、もはや歴史カリキュラムというのは特定のグループが独占するものではなく、多様な派閥から出てきて多方面から議論しなければならないと考えるようになった。これが本書ができた経緯である。

## (2) 本書の経緯

・1995年のAHA (American Historical Association) でのパネルで新たな歴史教育研究に対しての新たな方向性が見えてきたこと

(登壇者)

- ・Stearns (カーネギーメロン大学の歴史学者)
- ・Wineburg(ワシントン大学の認知心理学者): Seixas (ブリティッシュコロンビア大学の歴史学者・教師教育者) と歴史のテキストを生徒がどう読むかを研究していた
- ・Robert Bain (ビーチウッド高校の歴史教師): 歴史教育改革の推進者
- ・Amanda Podany : カリフォルニアの歴史・社会科学プロジェクトの担い手

・Sterans, Sexias and Wineburg の試み: ロンドン大で歴史教育を研究してきた研究者たち (Peter Lee, Alaric Dickinson, Rosalyn Ashby and Denis Shemilt) 主催の学会に招待される。彼らは最も大きな歴史教育改革の試み+成功した SChP (School Council History Project) の担い手

→ここから、多領域の人物が (Historian, Teacher, teacher educator, psychologist, researchers and staff developers) 歴史教育を研究してきたのは北アメリカだけでないことが明らかになった。実際、1980年代から1990年代に、それぞれの関心から研究が数多く行われてきていた。

・この他にも Patricia Graham (教育史の研究者でスペンサー財団のプレジデント、AHA パネルのオーディエンスでも会った) のバックアップ、Lee Shulman (教育心理学者、カーネギー財団のヘッド) のバックアップがあった

## ※用語※

Heritage(遺産): David Lowenthal(本書の第4章)の定義。これはいわゆる History (歴史) とは分離して捉える。誰かが取り上げている歴史のこと。